

私から見た 土地改良

「結の故郷 越前おおの」

石山志保

大野市長

に聞く

石山市長は、平成三十年七月に福井県内、また北陸三県で初めての女性の自治体首長として大野市長に就任され、現在二期目を務めておられます。大野市では農業や環境に関して様々な取組をされています。大野市における取組や、市長のお考えなどをお聞きました。

聞き手 ● 中田峰示 株式会社奥村組 常務執行役員

大野市の四つの魅力

中田 大変お忙しい中、お時間を取っていただきありがとうございます。

本日は大野市における取組や、農業・土地改良に対する市長のお考えなどをいろいろとお聞かせいただければと思っています。

大野市のホームページを拝見すると、「歴史・文化・伝統が息づく、緑豊かな自然と美味しい水や食に恵まれた魅力あふれるまち」と紹介されていますが、まずは、大野市の概要や魅力についてご紹介いただけないでしょうか。

石山 大野市は福井県の東部に位置し、岐阜県境と接する山々と盆地からなり、面積は約八七〇㎥で、福井県の約二割を占めています。このうち約八七％が森林で、残る面積の部分が主に盆地になり、約二万九〇〇〇人の方が暮らしています。平成二十五年に市のブランドキャッチコピーを「結の故郷（くに）越前おおの」と決めました。大野の市民性を示す「結（ゆい）」は、冠婚葬祭や田植え、稲刈り、土工事など村人総出で助け合って物事をしてきた、ふるさとを表す言葉として根づいています。

まち全体を端的に紹介申し上げる時には、天空の城と星空と美味しい水のまち、それが大野市ですとお伝えさせていただいています。また、晩秋から降雪期の時期に現れる「天空の城越前大野城」、北陸最大級の道の駅である「道の駅越前おおの 荒島の郷（さと）」、



越前おおの荒島の郷





農業の原体験

「農業が身近にあった子ども時代」

中田 市長は愛知県の安城市のご出身と伺っていますが、私は、小学校時代に社会で安城

九頭竜湖と、アンモナイトが日本で最初に見つかるなど化石の宝庫の意味を掛け合わせて「九頭竜の恐竜・化石」、そして「日本一美しい星空 六呂師高原」の四つを大野市の魅力として積極的にアピールしています。中部縦貫自動車道が市内に延伸して高速交通網につながりましたので、日本全国から注目されるような市の魅力づくりに取り組んでいます。



天空の城 越前大野城

市は日本のデンマークと呼ばれる先進農業地域であると習いました。また、仕事等で関わりのある土地改良関係であれば明治用水もあり、なじみのあるところなんですけども、子ども時代はどのように過ごされたのでしょうか。農業との関わりなどはありましたか。

石山 はい、安城市といえば日本のデンマークと、私も小学校時代に教えられて育ってきました。実家はいわゆる兼業農家で、家族で食べるためのお米作りと畑作をして、祖父母は、自分たちは農家ではなく百姓だと言っていました。物心ついたときには周りが土地区画整理され、宅地化されていくという年代に入っていました。幼い私を抱っこし



大野市化石発掘体験センターHOROSSA

ている両親の写真を見ると、背景にはまだ何も建っていない台地が広がっていました。自宅の庭の敷地には、自家用栽培の畑が広がっていて、主に祖母が畑をやっていました。夏になるとスイカが、秋になるといろいろな農作物ができましたし、稲は種もみから苗を育てることをしていて、私達姉弟はその周りで遊んでいました。家族皆で田植えに行きましたが、私達は手伝いじゃなくて泥んこになって遊んでいたというような幼少時代を過ごしました。家の納屋の中にあつたトラクターや田植え機を、子供心に大きく感じたことを思い出します。

大野に来て見ますと、それらの機械がもっと大きいんですね。比較的大きい水田面積を大型で能力のある機械でもって大野の方々は農業をされるので、すごいなって思ったのが、大野の農業の最初のイメージです。

地球環境問題への関心から 大学・環境省へ

中田 安城市で高校まで過ごされた後、東京大学へ入学され、工学部を卒業されたということですが、大学ではどのようなことを学ばれたのでしょうか。

石山 大学では都市工学科の環境衛生コースを選択しました。都市部の、人が密集することによる課題を解決していくとする学問です。水資源の確保、汚水や廃棄物の処理を扱う分野から地球環境問題を扱う分野まで学びました。

一九九二年、私が高校生の頃に地球サミットがあり、地球環境問題が社会でクローズアップされ、

気候変動枠組条約や砂漠化対処条約、生物多様性条約などができました。石油資源には限りがあり、地球環境にみんなが目配りをしながら生活する社会が大事ということが言われ始めた頃でした。そういう頃に私は多感な時期を過ごしました。

先ほど幼少期の話をしましたが、自宅の田畑以外にも、親戚など親しくさせていただいた方々のところで、田んぼの水路に飛び交うホタルを見に行ったり、みかんの段々畑で遊んで草の種や葉っぱをタイツにいっぱいにつけたり、イチゴハウスの中に入らせてもらったり。自然豊かなところ、田園風景が広がるようなところで身近な人とふれ合ってきましたので、そういった世界がずっとあるといいなと思ってきました。

大学で学科選択をする時、工学系の中でも環境と合わさって人が暮らしていくことを学びたいと環境衛生コースを選びました。人の生活はもちろん大事ですが、生活を大事にするために、環境も大事にしていく必要があるということ。地球サミットがあり、「持続可能な開発」という言葉が言われるようになりましたが、二極対立ではなくて両方ともが揃って存在できるように、ということをお社会や大学で教えていただきました。

また、大学での部活動の一環と言って良いと思いますが、伊豆半島の海辺近くにある大学学生寮の夏期お手伝いに行っていました。お手伝いの合間に、海に飛び込んで思いっきり自然を満喫したり、地元の方や商工会青年部の方達と海の家などでふれ合ったり。大学の演習林も見に行きました。私はその地域で実験したことにとっても興味を持ちました。けれども、地元の方々から、地方暮らし

を寂しいとか、残念に思っている声を聞くことがありました。私なりに、地方に光を当ててと言いますか、地方暮らしっていいものだねっていうことができないかという問題意識を持ちました。

私の話を聴いてくださった大学の先輩から、国立公園管理や自然保護行政を担うレンジャーのことを教えていただき、それが環境省職員を目指すきっかけになりました。

中田 お話をお聞きしていると、レンジャーとして環境省に入られたっていうのは必然じゃないかなとも感じます。

石山 そうですね、振り返ると、私が行った先の場所です。人に出会うご縁がありまして。こちらの方が良いんじゃないかとお話を伺いして、新しい世界に飛び込んだ瞬間が何回もありました。大学時代にお世話になった方々と今になって改めてご縁が繋がったということがありますので、どの場所でも一生懸命に取り組んだことが良かったのではないかと思います。

中田 環境省では、どのようなお仕事をされていますか。

石山 自然保護局（当時）という部署をベースに八年間勤務しました。

一年目については、もう本当に丁稚奉公ですから、ひたすら課の窓口をしていました。二年目は箱根の国立公園管理事務所へ、三年目、四年目は単独駐在で長崎県の雲仙自然保護官事務所で現場の仕事をさせていただきました。レンジャーを志望する人はみんなそういうところに行きたくて環境省に入省されます。私の赴任地は、両方とも盆地で山に囲まれているところでした。



雲仙自然保護官事務所勤務の一コマ

雲仙に勤務していた時、雲仙普賢岳が噴火してから一〇年目の年に当たりました。住民の方と協力して雲仙温泉街の復興プロジェクトの計画作りなどを、「がまだせ」は長崎の言葉で「頑張れ」という意味なんですけど、「がまだせ」を合言葉に一生懸命やりました。雲仙温泉街や国立公園の場を使って、観光をはじめとする地域振興が図れるかがテーマでありました。自然環境や美しい景色があるからこそ観光客が来る、そして温泉という人を受け入れられる場があるから発信ができるという、開発か環境かという対立ではなく統合させることで、お客さんに来ていただくということ

とをやりました。仕事は非常に興味深く、地元青年観光会の同年代、二〇代、三〇代の方と一緒に活動させていただいたことはとても思い出に残っています。

中田 その頃から、既に「まちづくり」に関わっておられたということですね。

石山 人が生活するところでの基本的なインフラに関わることや、都市計画、道路計画などについて大学時代に学んだ後に、実際の現場で必要とされていることについて地元の方と膝を突き合わせて考え、進めることができました。関わらせていただいたのはまちづくりの一端でありますけれども、私にとつてとても良い経験をさせていただきました。

中田 私も雲仙が噴火する前に、長崎に勤務していたことがあり、噴火後に島原を訪れて雲仙の変った姿を見て、これからどのように復興するのだろうかと思ったことがあります。石山市長はじめ多くの皆さんの力によって復興が進んだのだなということが改めて分かりました。

環境省を退職し、 山と自然がいっぱいの大野市へ移住

中田 平成十七年三月に環境省を退職して大野市へ移住されました。ホームページを拝見すると、「縁があつて大野市に来ることになったときに、山と自然がいっぱいということで喜んで即決」と書いてありましたが、当時のお気持ちなどをお聞かせいただければと思います。

石山 私はそれまで大野市を訪れたことがありま

せんでした。夫の故郷が大野市でありまして、夫から大野市は自然環境が豊かなところと聞きまして、自然が豊かであり、まちなかには城下町があり、たくさんの方が生活していらつしゃると。さらには、田園風景が広がっていると聞きましたので、それなら大丈夫でしょうと、大野市への移住を即決しました。

初めての大野市訪問は、岐阜県境の方から入りました。当時通行可能だった中部縦貫自動車道の油坂峠道路、その先は国道一五八号を通っていききました。ゴールドデンウィークの山間部の景色というのは木々の枝や幹が見えるのみで茶色いのです。和泉村(当時)の中心部にさしかかる辺りから芽吹いた新緑がだんだん鮮やかになりました。新緑が綺麗な山村景色から入り、さらに国道一五八号を下って山間部から盆地に抜けてくると、田植えの時期の大野盆地の緑の景色がばあっと広がったんですよ。

田園が広がっている風景に、落ち着きとほっとするところを感じ、全く心配はなかったです。

市役所職員を経て 北陸三県初の女性首長へ

中田 平成十七年四月に大野市に来られて、大野市役所へお勤めをされるようになったとのこと、ちょうど私が福井県庁に勤務をしていた時期とも重なるのですけれど、市役所でお仕事をされるようになったきっかけというのは何かあったんですか。

石山 大野市に移住しようと思決しましたが、何らかの仕事は続けたいという思いがありました。

仕事を探すために情報収集を始め、大野市役所職員の人採用試験があることを知りました。一般職の採用試験を受けて、幸いにして採用していただけることになりました。

中田 その後、市役所で約一三年間職員として勤務されて、平成三十年に市長に立候補されたというのですが、どのようなきっかけがあったのでしょうか。

石山 大野市役所に入ってから主に企画部門や財政部門を担当しました。また、産業振興部門では中心市街地の活性化の業務を担当いたしました。そのため、市長の近くで仕事をさせていたたく機会が多かったです。その頃から私の中で、大野市における課題を認識し始めました。自然豊かな森林フィールドがあり、盆地では田畑が広がる落着いたところがあり、それから城下町として人が水を大切にしながら生活している、暮らしているエリアがある。こういう素敵な環境を生かしながら、市民の生活をいかに守っていくかということが、私のテーマとしてずっとありました。

平成二十年から日本全体の人口が減少する社会へと変化する中で、当時は、どちらかというとそれに打ち勝って、人口増加に向けて頑張るというのが全国的な動きでした。大野市は、起爆剤として中部縦貫自動車道の整備促進を図ろうと強力に要望活動を展開しました。

山崎正昭参議院議員、岡田高大前大野市長をはじめ多くの関係者の方々の要望活動が実り、平成二十一年から二十七年にかけて事業化区間が伸びていき、早期に開通できるのでないかという雰囲気が出てきました。

そのような中で岡田前市長が勇退されることになり、せっかく前向きな機運ができていたのを止めてはいけないという思いと、これまでの私の経験で大野市のためにできることがあるのではないかという思い、働く世代が頑張らないといけないという思いがありました。それまでに行政マンとして国行政と地方行政に携わり、行政のトップである市長はものすごくジャンプアップになりますけれども、挑戦してみようと思いました。

市長として大事にしている 「人と自然がともにずっと生きていく 持続可能な地域づくり」

中田 今二期目をお務めですが、市長になられて大事にされていることはありますか。

石山 私のモットーは「持続可能な地域づくり」です。市長に立候補した平成三十年当時は、持続可能な地域づくりと言うと、財政運営上持続可能ということイメージされる方が多かったです。市政をお預かりする時に、財政運営をきちんとすることは不可欠です。その上で、私の根本にある思いとしては、大好きなこの大野という土地柄や人が生活する空間というものを、大野らしく後世に伝えていきたいということがあります。それを表現するために、「人と自然がともにずっと生きていく持続可能な地域づくり」という言葉にしてみなさんにお伝えしています。

「人と自然がともにずっと生きていく」につきましては、先ほど申し上げた環境と開発の二極対立ではないこと、地域資源を活かしていくこと、

そして大野らしくということが大事だと思います。市の総合計画にある一〇年後のまちの将来像「人がつながり地域がつながる 住み続けたい結のまち」については、計画策定時に市民の皆さんと市職員が一緒になって言葉を一つ一つ選んでくれました。話し合いの中で、例えば、大野市に超高層ビルを建てましょうとか、大規模な遊園地を作りましょうとか、そういうものを求めるかと言うと、そうはなりませんでした。やはり大野の歴史を大切にすると、人々がこれまで一生懸命作ってきたものとか、あるいは大野の地形・地質、雨の降り方という自然があつて、四季折々の固有のものを大切にされていました。

自然環境や地域環境と、これまで人がつくってきた歴史が、大野らしさになるはずで、その部分を大事にして、残していくものは残していく、時代に合わせて変えていくものは変えていくということを、一生懸命させていただいています。

中田 今、市長から総合計画という言葉が出てまいりましたので、現在は第六次の総合計画ですが、その中でどのような分野の政策を重点的に進めておられるかお伺いできればと思います。

石山 令和三年度にスタートした第六次大野市総合計画は、令和十二年のまちの将来像を「人がつながり地域がつながる 住み続けたい結のまち」と定めています。本計画の特徴として、「市民と市職員が手づくり」で作成したことが挙げられます。コンサルティングに委託をせず、地区別のワークショップやアンケートを踏まえて、計画づくりから多くの市民を巻き込んで、作成をしました。

また、「ニューノーマルとデジタル化」、「協働

してとりくむ」ことを重視し、市民一人一人が身近に実践できる行動を「みんなができること」として分かりやすく示しています。

「SDGsを物差し」として、一七のゴールと計画の各施策を体系的に関連付けていまして、令和五年度の「内閣府SDGs未来都市」と「自治体SDGsモデル事業」に選定されました。

本市の人口減少は全国的な傾向よりも早いペースで進んでいます。人口減少を直視し、人口を維持増加させる方策はもちろんのこと、人口減少に適応した地域社会をつくる方策もあわせて、両面から総合的に取り組んでいます。

まちの将来像を実現するために六つの基本目標を設定しました。基本目標のそれぞれを端的に表す言葉である「こども」、「健康福祉」、「地域経済」、「くらし環境」、「地域づくり」、「行政経営」は、大野市民の関心事を良く表していると思います。

最初に「教育・子育ての充実」です。全国や福井県の中でもトップクラスの子育て支援策を「大野ですくすく子育て応援パッケージ」としてまとめて発信しています。ライフステージに応じたきめ細かなサービスの提供が特徴です。子どもや若者を地域全体で支えるまちづくりを進めているというところで、令和五年八月にこども家庭庁が提唱する「こどもまんなか応援サポーター」としての活動を宣言しました。新しい時代の学び舎作りについて、児童生徒の教育環境の充実を最優先課題に位置付け、小中学校の再編を進めています。保育所、小中学校、高校が連携しながら、子どもたちの一八年の育ちを切れ目なくつなぐ教育を進めています。部活動の地域移行や、国型コミュニティ

スクールなど、地域に根差した学校づくりも進めています。

次に「健やかで幸せな福祉」です。「おおのヘルスウオーキングプログラム」は、健康寿命延伸と医療費削減を目的に令和二年度に開始し、今では人口の約一〇%の市民が参加しています。参加者には歩数に応じてポイントが与えられ、ICTを通じて活動成果を見ることができるところから、歩くことの意欲の継続につながっています。

令和六年三月の北陸新幹線金沢・敦賀間開業や、今後見込まれる中部縦貫自動車道の福井県内全線開通により、人の交流や物流の拡大が見込まれま



大野市の中山間地域の風景

す。この好機を最大限に活かし事業者の稼働力に つなげるために、農林水産物、観光商品・サービスなどの磨き上げや高付加価値化を進めています。二〇五〇年までにカーボンニュートラルを達成している望ましい姿を描き、脱炭素と市民のハッピーな暮らしの同時実現を図るための取り組み方針を示した、「大野市脱炭素ビジョン」を令和五年三月に策定しました。本市の約九割を占める森林の二酸化炭素吸収効果を最大限に発揮するため、民間事業者が操業する木質バイオマス発電所への間伐材の安定供給や、主伐、再造林の具現化に向けて取り組んでいます。

高齢化や人口減少により自治会活動を担う人材が不足し、活動を継続していくことが困難になってきているため、市内九つの公民館では、社会教育だけでなく防災対策、見守り、居場所づくりなど、住民主体で地域課題解決に向けた多様な取り組みが行われるよう支援しています。

行政においても働き手不足に対応しつつ、市民サービスを維持向上できるよう、デジタル技術を積極的に活用しています。本市は高齢化率が高く、地域コミュニティが比較的良好に残っており、人とのつながりも大切にしながらデジタルを活用しています。

主な施策をお話してきましたが、こうした施策を進めていくに当たり大事なことは、市民の皆さんと計画作りから一緒に取り組むことです。計画はまちづくりの道標です。市民や各種団体などが主体的に取り組む指針であることをお伝えしつつ、実行に当たっては協働を進めていっています。

中田 計画づくりだけでなく、実際の政策を進め

ていく中でも、そういった方々に加わっていただいて、ということでしょうか。

石山 そのとおりです。実行も実行後の検証も、毎年みんなで検証しながら、自分たちができるところを持ち帰ることもずっと続けています。

中田 計画を作った後は作りっぱなしで、一〇年経ったから作り直そうみたいなことではなくて、一年一年検証して積み重ねていくということはある意味市のやられていることが市民にも見えるということだと思えますので、すごく大事なことかなと思います。

石山 総合計画の検証となりますと「産官学金労言」のそれぞれの方々に参加していただいて取り組んでいます。

「越前おおの型 食・農業・農村ビジョン」について

中田 農業や農村への取り組みについて伺います。全国的にも農村の人口の減少が進んでいて、農業の担い手の確保等が大きな課題になっていますが、大野市では、農業や農村の振興についてどのような取り組みをされているのでしょうか。

石山 大野市は、「越前おおの型 食・農業・農村ビジョン」という大野市独自の農業に関する施策を一体的に推進するための五カ年計画を持っています。現在のビジョンは令和四年二月に定めたものです。本市の農業や農山村などの財産を守り、未来に引き継いでいくために、目指す姿を「食と農で未来へつなぐ 越前おおの型農業」とし、実

現するために三つの柱を定め、分野ごとに基本目標や重点を置く取り組み、市が行う取り組み、みんなができる取り組みを掲げました。

今回の四回目の改訂に当たり、農と食との関係性を重視し、「農業」「農村」と並んで「食」を一つの柱としました。消費者の需要を意識することによりさらなる消費につなげ、「儲かる農業」を目指す担い手を支援する施策を盛り込

みました。また、市民全体の「食育」意識を高めることを目的とする「越前おおの食育推進計画」を統合し、「食育」に関する施策を総合的に推進しています。

大野市内の耕地は約四二〇〇haで、そのうち水田が約九七％です。福井県内の水田比率は高いのですが、特に大野市は高く、畑作がとても少ないことはメリット・デメリットの両方あると思います。農業経営体数が平成二十七年に比べて令和二年では約七割と減っていて、認定農業者数が近年約七〇団体・人で横ばいを保っていますけれども、実態を見ると個人から団体へと移ってきています。個人の認定農業者で離農される方がいらっしやることを、現場で感じています。

昭和四十年代後半から進められた土地改良事業により、ほとんどの地域で機械化に対応した三〇a区画の圃場に整備されていますが、老朽化対策をやっけていかなくはならない時期になり、営事業の取り組みが進められています。

耕作放棄地ですが年々増加傾向にあり、農業委員さん達の活動を拝見していますと、耕作放棄地になりそうなところを、次の耕作できる人にどうやって渡していかうかと心を砕いていらっしやいます。

これら大野市の農業・農村の現状を踏まえて、農家、農業経営、農地を見つめてそこでの技術力アップですとか効率化、儲かる農業を目指していくことはもちろん大事ですけれども、そこだけを見つめ続けると少し息苦しくなってしまう。前向きになれる外からの要素として、この食物、この農作物は美味しいねという評価とか、これを



ブランド化された大野産米



大野市で採れた野菜

食べてくれた消費者さんたちの幸せな笑顔が見られることかですね。高付加価値をつけていくに当たりまして、買っていただける方の笑顔、消費者に受け入れられる部分を大切にすることかなと考えます。

もう一つは、中部縦貫自動車道の福井県内全線開通により来訪者が増えることを見据えて、何か美味しい香りがすること。道の駅や飲食店で大野市の安全安心な農産物を使った料理が提供されていて、美味しい水が使われていて、なんかいい香りがするねというのが人を惹きつけるんじゃないかと考えます。

中田 美味しい香りってなかなかいい言葉ですね。
石山 ビジョンの一つ目の柱が「食」分野。目標は「食守（しょくもり）」が引き継がれているまちです。「食守」とは、食を守る消費者の目もあれば、食を作る現場を守る目の両方があります。二つ目の柱が「農業」分野で、目標は次世代技術を生かし多様な担い手の活躍で引き継がれている農業です。三つ目の柱は「農村」分野。目標は多様な人材の取り組みで引き継がれている活力ある農山村です。

中田 最初に言われた食守とか食文化はすごく大事なことだと思えます。今米の値段が高いというようなことが話題になっていきますけれど、逆に農家にとってみれば、今まで赤字だったものが少し戻ったということでもありますし、そういうことも含め、食や農業についていかに消費者の方に理解していただくかということは大事だなと思います。食育という点では、実際に学校などでのような取り組みをされているのでしょうか。

石山 学校給食の食材に地場産を使うことは、給食のメニューを組む時から気をつけていただいています。学校給食で地場産野菜の提供を行った量の割合は、令和五年度の実績で二〇・八%ですね。令和八年度目標は三三・〇%です。また、主に小学生が、学校給食の食材を育む畑に関わる体験活動に参加しています。各学校では食に関する年間指導計画を作成し、給食をはじめ機会をとらえて教育活動において食育を行っています。

特に、大野で生産される食材としてはお米が特徴的なので、市内小中学校給食で提供するご飯については全て大野市産米を使っていたいています。子育て応援と米の地産地消促進を兼ねてコロナ禍の時に始めました。大野の子どもたちに、地元で質の良いお米が採れることを知ってもらいたい、安心で美味しいお米が食べられる経験を味わってほしいという思いもありました。大野産米を使用することで高くなる食材費については、市から補助を出しています。

中田 小さい頃から慣れ親しんだ味って忘れられないですよ。私は福井県のお隣の岐阜県高山市の出身なので、高山の米は一番美味しいなと個人的に思っていて、もちろん福井に来た時には福井の米も美味しいなって感じたんですけれど、大野の子どもたちが大野のものを食べて育つことで、大野の味をずっと忘れないということは大切ではないかなと思います。

石山 高山もとても美味しいお米の産地ですね。平成三十年の米・食味分析鑑定コンクール・国際大会が高山市で開かれて、大野からも何人か出品され、私も参加いたしました。結果として高山

山の方々が金賞をいくつも受賞されました。お米作りって年に一度の収穫に賭けて取り組まれているので、丹精込めて作ったお米が金賞に選ばれて、涙を流されて喜ばれている農家のお父さんのお姿を見ました。

中田 大野市は水が綺麗だし、寒暖差もありますので、そういうことができる素地がありますよね。
石山 あると思っています。大野のお米が最高品質にたどり着く後押しをしようと、大野市独自のお米コンテストを実施しています。大野市金賞米は大変美味しいお米ですので、道の駅などで販路を確保しつつ、できる限り高価格帯に設定して販売することで、農家さんにお返しをできるようにしていきたいですね。

大野市内には中部縦貫自動車道の沿線に道の駅が二つ、道の駅九頭竜と道の駅越前おおの荒島の郷があります。道の駅と言えば地場産品がそろった農林水産物直売所が人気です。道の駅越前おおの荒島の郷が令和三年四月に開駅するのに合わせて、二つの道の駅に出荷する大野市道の駅産直の会が発足しました。現在、一二件の農家さんが加入されています。中部縦貫自動車道大野油坂道路が開通すると中京方面からの来訪者が増えますので、道の駅直売所を新たな販売ルートとしていただき、農業を頑張ろうという農家さんの意欲につなげていきたいです。

また、地場産の野菜を使用している市内飲食店の割合は、令和五年度実績で約六〇%となりました。令和八年度目標一〇〇%を達成できるように飲食店へ働きかけていきます。

大野市特産物としては、里芋、ネギ、穴馬

スイートコーン、舞茸などがあるのですけれど、上庄里芋は地理的表示（GI）登録されていますから一番特徴的です。粘りが少なく煮崩れしにくい歯ごたえのある食感が特徴のとても美味しい里芋です。農作業に手間がかかることから近年の収穫量が減少しているため、福井県やJAの方々のお力をいただきながら、作付面積を拡充できる農家さんへの支援を手厚くしています。

水田と里芋畑がモザイク状に配置されているのが大野市らしい田園風景です。里芋は連作障害がある作物で、毎年植える場所を変えなければいけません。前年里芋が植わっていたは場に今年に行くと、そこは水田になっています。

担い手が減少する中で 大区画のほ場整備は必要

中田 現在、大野市では塚原地区で大区画のほ場整備事業の計画が進んでいるとお聞きしたのですけども、事業の取り組みについてお聞かせいただけないでしょうか。

石山 塚原地区など県営で実施されるほ場整備事業には、国や県の補助金等を充てることができ、残額について市と土地改良区とで半分ずつ負担するという形で支援させていただいています。水田を大区画化するほ場整備事業については、福井県の大区画化加算という制度があり、三分上乗せして県で負担していただけます。塚原地区については、国と県が負担する分の残りを、折半ルールで割った上で、地元負担分の方へ県費三割上乗せ分を充てます。地元負担が少なくなるようにする

ことで、大区画のほ場整備を促進しています。

中田 私が福井県庁に勤務していた時には、既にその制度があり、県の負担を手厚くして、それに合わせて市町にも負担をしていただくことで、なるべく地元負担を少なく、ということをやっていたと思います。

石山 制度は当時から変わっていないと思います。市と地元の折半ルールは平成二十年代から実施されていて、私もそれを引き継がせていただいています。塚原地区では大区画化に入りますので、県の上乗せ部分については、地元負担分から差し引く形になりました。

中田 担い手が不足する中で、例えば大区画ほ場整備などはこれからの農業にとって必要なことだと思いますが、これからの農業についてどのようなことを考えておられますか。

石山 令和三年のほ場の整備状況は、1ha以上の大区画施工面積が一〇・九%に留まっています。農家の数が減っている、あるいは担い手に集約されていることを考えますと、スマート農業がしやすくなるよう大区画化が必要です。農家さんの方でも、ドローンであるとか無人田植え機とか色んな機械の扱いに、高齢の方々も青年の方々も意欲的に取り組まれています。

担い手不足については、農を含む第一次産業が先行していると感じます。集落営農組織などでは、企業等を退職してから農業組織に入られる方が多いです。ところが、六〇歳の定年が延長されて六五歳になりましたので、六五歳から農業に入ってこられた方が、コンバインなど大きな機械を運転できるだろうかとか、最近出てきたAIとかド

ローンみたいなデジタル機器を操作できるだろうかということが問題になります。そうしますと、若い方々が早いうちから農業に入ってこられるように、機械化・無人化といった効率化を導入していく必要に迫られています。

福井県では全域にGPS基地局が入って今年で三年目になりました。一年目は有人で田植え機を動かして水田範囲を測り、二年目の田植えの時には一年前に測ったデータを覚えた無人の田植え機が自動しました。私も現場を見せてもらいました。スマート農業が現場でできることが分かってきて、今年は更にという形になってきています。また、そういった機器を導入しようという農家さん方も出てきていますから、機運の高まりを感じます。

大野市のきれいな水の保全と活用について

中田 農業以外のお話も少し伺いたいと思います。先ほど、大野市のきれいな水や環境と聞かれていましたが、大野市には多くの湧水があつて、国土庁の水の里一〇〇選に認定されたり、市が取り組んでおられる地下水保全活動が日本水大賞の環境大臣賞を受賞されたり、ということを伺っています。水というのは、人の暮らしにとって、環境も含めてなくてはならないものだと思いますが、大野市では、水の保全と活用についてどのような取り組みをされているのでしょうか。

石山 市内には古くから各地に水が湧き出すところが数多くあり、これらを「清水（しよず）」と呼んで、人々がさまざまな用途に利用してきました。今日においても、市街地を中心に各家庭で

直接地下水をくみ上げて生活用水に利用するなど、恵まれた水環境がもたらす恩恵を受けながら生活をしています。

市民が地下水に寄せる関心は高く、水量や水質の確保、生態系の保全など水環境に関するさまざまな課題に対応するために、これまで各種の行政計画を策定して取り組んできました。

平成二十六年の水循環基本法施行を契機に、これまで取り組んできた地下水保全の視点に加え、表流水も含めた大野市全域での水循環を一体的に捉えて課題を整理し、事業者や有識者、関係団体、市民、公的機関等のそれぞれが互いに連携・協力して、さらなる水循環の健全化に取り組むために「大野市水循環基本計画」を令和三年二月に策定しました。

同計画冊子表紙に「健全な水循環のまち」のイメージ図を掲載していきまして、地下水を利用するとか湧水のある景色を楽しむ、水辺で遊ぶ、生き物を調べるなどに加えて、直売所で野菜を買うことや、地産地消を支えることも描かれています。

三つある基本方針の一つ目は、流域マネジメントの推進です。水を使いたい放題使ってしまったら枯渇してしまうことがありますので、流域マネジメントという言葉が使われています。私達が水を全てコントロールできるわけではありませんが、上流から下流まで、水を使っている様々な人や主体がそれぞれ役割を果たしていこうと、大野市水循環推進協議会を設置しており、その中には農林水産業に関わる方にも入っていただいています。

農業に関する事柄としては、田んぼが地下水涵養に寄与していることが分かっていますので、



約四〇haの冬季水田湛水を継続実施し、農業水利施設の長寿命化対策及び共同活動による農地維持作業の促進に取り組んでいます。近年、大雨への防災対策として流域治水の考え方が広まりました。田んぼダムによる貯留機能の向上を期待し、来年度以降その面積を増やしていきたいと考えています。

基本方針の二つ目は、水環境に関わる人材の育成と水文化の継承です。流域マネジメントがうまく機能し一〇年続きますと、当たり前になつて、その大切さがだんだん分からなくなってしまうということがあります。市民に不安を感じさせないという点では良いのですが、健全な水循環は多様な人々が関わるることによって維持されているとい

う点も重要です。健全な水循環の重要性についての理解を深め、人材の育成と水文化を継承していくことが大切だと思います。大野市には「越前のおの水のがっこう」と「本願清水イトヨの里」という施設がありまして、そこでは大野固有の水環境や魚が生息する環境を解説しています。

基本方針の三つ目は、災害や気候変動、地下水障害等への対応です。近年、急に短時間で大量に雨や雪が降ることが増えました。一方では水不足ということもあります。水は多すぎても困るし、少なすぎても困ります。地下水位が低下し過ぎますと各家庭等において井戸水が枯れてしまいますので、市内三カ所で地下水位の観測をしています。地下水障害対応タイムラインを作成し、基準観測井の水位により、地下水注意報・警報を発令する運用をしています。

中田 水は上流から下流までつながっていますし、あって当たり前みたいなもので漏水などが起こって改めてありがたみが分かるということもあるかと思えます。単に地下水の保全ということだけでなく、水は上から下まで全てつながっている、それをこういう総合計画の形にしてしっかりとまとめておられるということですね。

「星空保護区®」に認定された 日本一美しい星空

中田 もう一つ、大野市の星空が、「アーバン・ナイトスカイプレイス部門」で「星空保護区®」に認定されたという話をお聞きしたんですけど、一般にはなかなか耳にすることのない言葉ですので、ど



日本一美しい星空

ういうものなのか教えていただければと思います。アジアで初めて認定されたともお聞きしましたが、**石山** 令和五年八月二十一日、大野市の南六呂師エリアが「星空の世界遺産」とも呼ばれる「星空保護区[®]」に認定されました。認定部門は「アーバン・ナイトスカイプレイス」で、この部門での認定はアジア初となりました。

「星空保護区」とは、光害問題に取り組むNPO「ダークスカイ・インターナショナル」が認定する、暗く美しい夜空を保護するための優れた取り組みを行う地域のことです。

アーバン・ナイトスカイプレイスは、都市に近く、夜間に人工的な光の影響を受ける中で暗い夜空を保護するための優れた取り組みを行っている地域が対象になります。

環境省の全国星空継続観測という調査がありまして、平成十六年と十七年に、大野市の大矢戸と

南六呂師でそれぞれ、日本一美しい星空が見える場所となりました。南六呂師エリアには、北陸最大級の口径八〇cm天体望遠鏡やプラネタリウムが福井県自然保護センター内にあります。

この地域資源を地域振興に活かそうと、平成三十年から、福井工業大学と連携して星空観測データの収集、宇宙や光害に関する子どもたちへの教育、星空保護区の認定申請などに取り組んできました。また、光害対策型防犯灯を開発されたパナソニック株式会社と連携し、地域住民の方々のご理解をいただき、南六呂師エリア内の全ての防犯灯をはじめ照明設備について夜空に光を放たない方法へ設置変更しました。

民間の方々におかれても宿泊施設の改修やお土産づくり、星空の下でハンモック体験やランタンを飛ばすイベントなどを開催されました。

星空保護区の認定に至るまで、多くの関係者の

皆様に関わっていただいております、とてもありがたかったです。

中田 観光で来られる方にとっても、きれいな星空を見ることができるといいうのは大きな魅力なのではないでしょうか。

石山 南六呂師エリアに行って雲一つない夜空を見上げ、満天の星が降り注いでくるような光景をご覧になったら、本当にびっくり、感動しますよ。

手軽に星空を眺めたいという方向けには、市内一斉ライトダウンデーを行う日などに、大野市役所の駐車場でも多くの星たちをご覧になれます。天の川を見ることが出来ます。

星空保護区に認定されたことで各種メディアに大野市を取り上げていただく機会が増えました。星空を眺める目的で大野市に来訪され、宿泊や滞在時間を延ばしていただくことで、地域経済への貢献につながります。

中田 これを維持しようと思ったら、いろんな制約などもあるんじゃないでしょうか。認定についても、一度認定されたらずっとということではないと思います。

石山 夜空の暗さを毎年調査します。人工的な光が漏れていないか、観測をして、結果をNPOへ報告しています。大野の夜空が世界的に素晴らしい地域であることを後世に伝えていくために、光害対策に関する普及啓発活動や次世代を担う子どもたちへの教育も継続しています。

新たな魅力増強として、六呂師エリアにおける滞在を促進するため、新しいキャンプ場「SORA to DAICHI（そらとだいち）」が令和七年夏にオープンする予定です。多くの皆さんに現地をゆつくり訪れて、日本一美しい星空を愛でいただきたいと思っています。

美味しい食が身近にある幸せが続くよう、農業者や土地改良関係者の笑顔につながる取り組みを

中田 楽しいお話をお聞かせいただいているうち

に時間がずいぶん過ぎてしまいましたが、あと二つほどお聞かせ下さい。

市長は、現在福井県の農業会議の会長もされてるということで、これまでは主に大野市のお話を伺ってきましたけども、福井県の農業や、福井県から見た日本の農業について感じておられることを教えていただければと思います。

石山 はい、農業とか農に関わる方々が前向きに取り組んでいただける、今後もっとそういうふうになるという心から願っています。

根本的に人は生きていくためにエネルギーを摂っていかなければならなくて、そういう意味で、美味しい食が身近にあるのはすごく幸せなことで、美味しい農産物を農家の方々が作り出されているということは素晴らしいことだと思います。様々な課題はありますけれども、光を見出して、光を見出したところにみんなで努力をして取り組んでいくということが大事なんじゃないかと思えます。

中田 非常に前向きなお言葉をいただきありがとうございます。いろいろな課題がある中で、農家が前向きに取り組めるよう行政としても後押しをしていただけると、農家の方も頑張れるということにつながるのだと思います。最後に、今日お聞かせいただいたお話は、土地改良建設協会の会誌に掲載され、全国の土地改良関係者が目にすると思います。そういった方々へメッセージをいただければと思います。

石山 農業に大事なものはやっぱり水だと思います。大野市においては、早くから土地改良整備が進み、安定して水が流れてくるほ場があります。

私は農道を散歩しながら、農家さんが毎日、田んぼの水の量の管理をなさっている姿を拝見してきました。水の管理ができるのは土地改良施設がしっかりしているからです。水を安定的に農地へ運ぶのに大事な役割を担っているのが土地改良施設です。土地改良施設が、安定的に安全に運営されていることが農家の笑顔につながっていきますので、どうか皆さんの技術力を活かしてこれからも頑張っていたきたいと思っています。

中田 本日は、長時間にわたり貴重なお話をお聞かせいただき本当にありがとうございます。ホームページで市長のプロフィールを拝見すると、先ほど市長も少しおっしゃってられましたけど、「まち歩き・むら歩き」が趣味だと載っていました。日々お忙しいと思いますので、なかなか難しいのかもしれませんが、もう大野はくまなく歩かれたんですか。

石山 まちなかや集落の辺りを歩いていますので、大野のまち歩き・むら歩きはかなりできたと思います。体力不足で山歩きはすっかり行けなくなっています。ありがとうございました。

中田 私もランニングやウォーキングが趣味の一つで、各地を訪れて空いた時間がある時に街中を歩いたりしていると、新しい発見があったり、仕事のヒントになる新しい考えが浮かんだり、ということがよくあります。今までもそうされてきているのだと思いますが、お忙しい中でお時間を見つけていろいろなところを歩いていたかどうかでまちづくりのヒントを見つけていただければと思います。大野市の一層の発展につなげていただければと思います。
石山 ありがとうございます。今日は楽しい時間

をありがとうございました。
中田 こちらこそ、今日はとても楽しく、良いお話をたくさん聞くことができて大変良かったです。どうもありがとうございました。



いしやま しほ
石山 志保

大野市長

出身地 愛知県安城市

平成9年	東京大学工学部卒業
平成9年4月	環境庁入庁
平成17年3月	環境省退職
平成17年4月	大野市役所入庁
平成30年2月	大野市役所退職
平成30年7月7日	第17代大野市長（1期目）
令和4年7月7日	第18代大野市長（2期目）